

手で触れる箇所としては、テーブル面の細菌汚染、昆虫飼育箱の細菌とかび汚染が多かった。また室内手洗い、トイレ手洗いに共通してコックの細菌汚染が見られ、石鹼入れの汚染も高かった。食事前のテーブルの消毒、昆虫等の世話をした後の園児の手洗いについては注意して行なう必要があると考えられる。また、石鹼入れは頻繁に掃除し、手を洗う際には汚れたコックから再汚染を受けないよう、コックも洗うように指導する必要があると思われた。

保育士が扱うものとしては、使用後のお手拭き、ふきん・雑巾類に細菌汚染が見られた。これらは頻繁に、また園児ごとに取り替える必要があることが再認識された。乾燥面であるにもかかわらず高菌数が認められたのは、汚物入れパケツのふたである。今回、大腸菌等は検出されなかつたものの、糞便由来病原体が汚物処理後の保育士の手を介して感染を広げる可能性があることを示す例と言える。

保育室内的ヒーターおよびクーラーのルーバーは細菌かびとともに汚染が高かった。園児の保育環境にそれらが吹き出されるところから、特にアレルギー対策としてもより頻繁な清掃が必要である。

寝具やほとんどのおもちゃは清潔に保たれていた。トイレの便座等も汚染が少なかった。日常の清掃方法の聞き取りを行なうことにより、将来の保育所環境衛生マニュアルの作成に役立てることが可能であると考える。砂場の砂から虫卵は検出されなかつたものの、2所の砂から大腸菌が検出されたことは、何らかの糞便汚染があったことを示唆するものである。

全国アンケートの結果と総合すると、昆

虫等を含む飼育動物等と触れた後の手洗い頻度が75%にすぎないことは、飼育小屋や昆虫箱周囲の汚染が高いことから問題であると思われる。砂場の細菌汚染が表層と深層とで大きく異ならなかつたことは、砂の掘り起こしが比較的頻繁に行なわれていることを示すものと思われるが、微生物学的にはより厳しい衛生管理が必要であると考えられる。保育士が感染症を媒介する危険性について、手洗い、衣類の交換の両面から、次年度以降慎重に検討する必要があると思われる。

E. 結論

全体的に、衛生面での意識、清掃・消毒の状況は良好であった。しかし昆虫等を含む動物の飼育環境の汚れ、下痢や処理汚物から保育士を介した感染の可能性などの問題も浮かび上がり、次年度の研究課題となつた。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

なし。(ただし2001年5月の防菌防黴学会に発表予定)

H. 知的財産権の出願・登録状況

特になし。

I. 参考文献

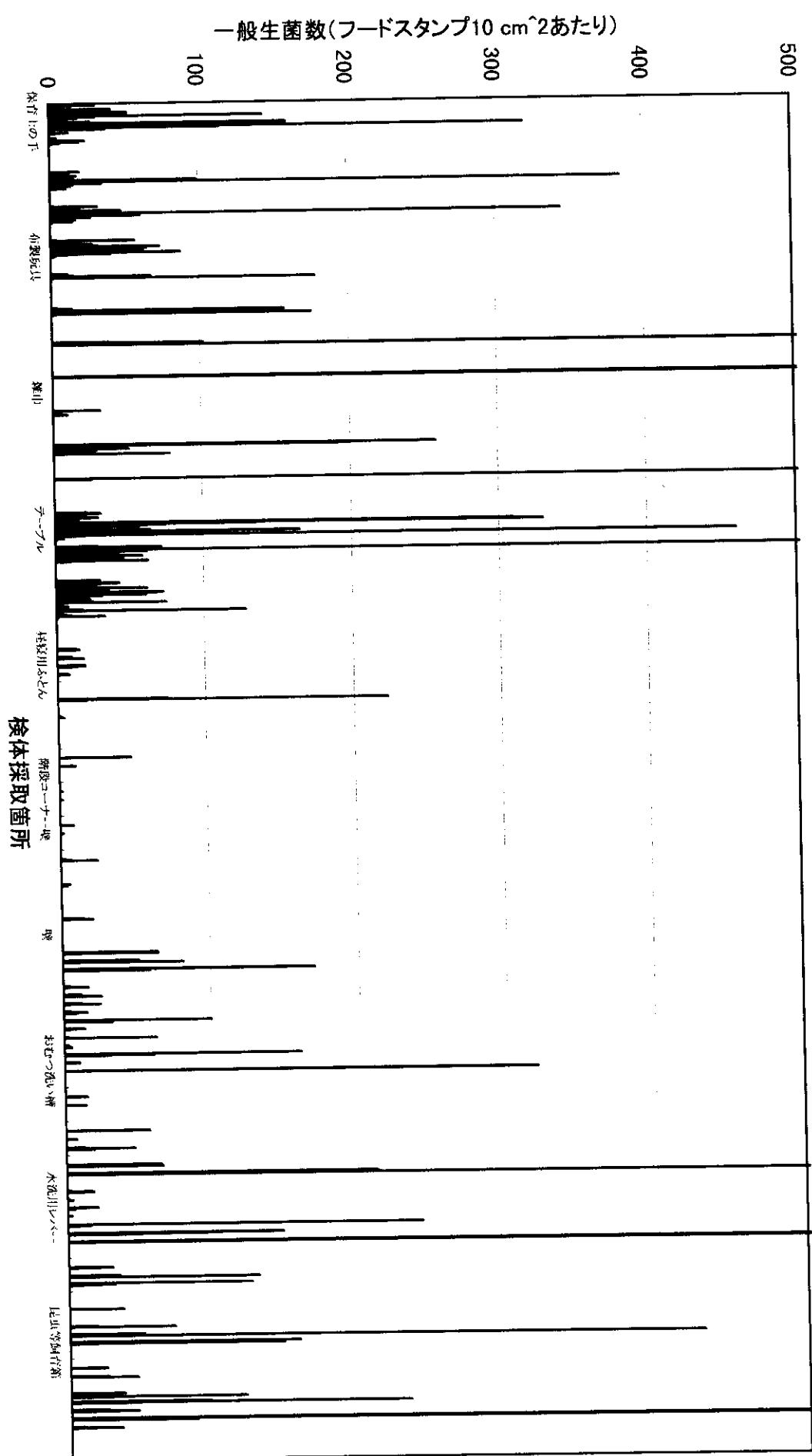
1) 影井昇

野菜・果実付着の虫卵および幼虫。
食品衛生検査指針 II、日本食品衛生協会、623-637、1978

保育所砂場
の砂の微生物検査結果

微生物	採取箇所	総採取箇所数	菌数の分布				
			< 10 ²	< 10 ³	< 10 ⁴	< 10 ⁵	< 10 ⁶
一般生菌	表層	12					3
	深層	12					5
	対象公園	6					
大腸菌群	表層	12	1	7	4		
	深層	12	1	9	2		
	対象公園	6		2	4		
大腸菌	表層	12	11	1			
	深層	12	9	2	1		
	対象公園	6	4		2		
黄色ぶどう球菌	表層	12	12				
	深層	12	12				
	対象公園	6	6				
サルモネラ	表層	12	12				
	深層	12	12				
	対象公園	6	6				
かび	表層	12		2	9	1	
	深層	12		2	10		
	対象公園	6			1	5	

保育環境における一般生菌数の分布状況



保育環境におけるかびの分布状況

